

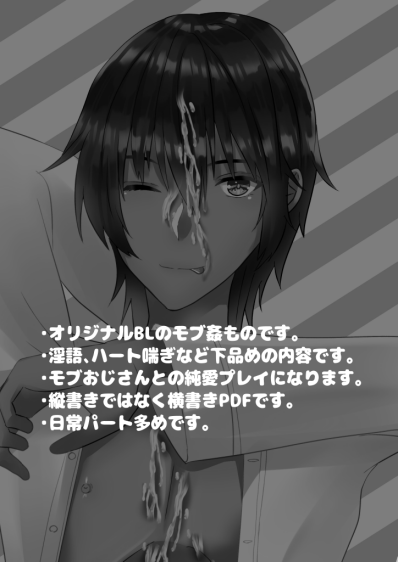
執事喫茶の裏メニュー♡

褐色肌のイケメン執事が
童貞キモオタ中年をやさしく筆おろし♡

体験版

FOR
ADULT
ONLY

colorful rain

- 
- ・オリジナルBLのモブ姦ものです。
 - ・淫語、ハート喘ぎなど下品めの内容です。
 - ・モブおじさんとの純愛プレイになります。
 - ・縦書きではなく横書きPDFです。
 - ・日常パート多めです。

ずっと気になっている喫茶店がある。

というのも、いわゆる女性向けの——イケメンたちが集うお店。いわゆる、執事喫茶と呼ばれるものである。

そんなお店に、30代真直のキモデブアニオタ男が突入しているのか——いや、いいわけがないだろ！

それでもどうしても、前を通りかかる度に気になってしまう。

その理由はというと、一人だけ褐色の肌を持った大変な美丈夫がいるからである。褐色の肌に茶髪、そして金色の瞳……顔立ちはどこか異国の風を感じさせる、少しだけ彫りの深い、芸術品みたいな整い方をしている。おそらくは本当に異国の血が混じっているのだろう。ハーフってやつですな。

拙者、根っからの褐色フェチであります。

しかしそれは主に二次元の褐色っ娘に限った話でして……と、思っていたが……褐色の彼を見かけるたび、脚はドキドキ、ちんこはムクムクな訳ですよ。

生の褐色肌、初めて見た……。

そんな感動から誤反応を起こしているのかな？ ちんこが壊れたのかな？ 気の迷いか？

そう思っていたけれど、とうとう我慢できずに彼を思いながらシコってみた。

……普通に、すんげえ抜けた。

そこからドンドン靴ががり落ちて行って、小説投稿サイトでいわゆる腐向けと呼ばれる成人向け小説を探し、読みあさっては受けを彼に当てはめてシコの始末であった。

うん、拙者、男もイケるようですな。童貞ですけど。

店に入る勇氣はないけれど、彼はよくこの時間帯に店前で掃き掃除をしているので、通行人を装ってチラリチラリと盗み見るのが日課になってしまっていた。

通り過ぎる時に、ふわりとどこか目いくてよい香りがして、あ～イケメンって本当にいい香りがするんですね、別人類ですね、と思い知らされたものだ。

さて、今日も今日とて通行人Aになりますが、っと……。

自分としては自然なつもりで、今日も店の前を通り過ぎ——ようとした時、不意に彼と目が合った。

あっ、やべ……。

そう思ったのも束の間、褐色の彼は微笑んで膝の手を隠した。ちよ！ 他人に手を隠られるとかいつぶりかな！？ っていうかなんだ！？ 不審者だと思われたか！？

「あ、ああああああの、なん、でしゃっ！？」

「あ、ごめんなさい。驚かせてしまいましたか……？」

ヒヤッ！ 声、初めて聞いた！ めっちゃ端正で艶やかな声やん！ たまらんッ！

「いれいれえ、な、なななななんですよ！？」

キモオタ、めっちゃ挙動不審。だからキモオタなんですな。納得。

「いえ……いつもここを通られるのに、お店に入ってきてくださったことは一度もないなって……入りづらいとは思いますが、当店はドリンクも食べ物も高いですよ。お急ぎでなければ、密って行ってくださいませんか？ ずっと気になっていて……」

「え……。」

まさか、まさか彼の眼中に俺が入っていたとはっ！ 推しに認識されるの、人生で初っ！
「……ご迷惑でしょうか？」

しゅん、と抱てられた子犬のように俯く彼……いかん！ いかん！ 弱気にされるとちんこが反応する！ いやそれより推しを惹かせて居るものか！ そうだ俺は彼に課金したことがない……推しだというのに！ 自分を恥じて、決心することにした。

「い、いいいえ！ ずっと入りたいと思ってたんでひゅ！ よろしくオナジャス！」

キモオタ全開の俺の返しにも、褐色の彼は「よかった」と艶然と微笑んでくれた。その笑顔、プライスレス。幾らでも課金しちゃう。

カランカラン、と心地よいベルの音とともに、落ち着いたジャズが流れる店内へと導かれる。

あ～やはり女性客ばかりですね～……申し訳ありません。しかし拙者も推しに課金したく。失礼しますぞ。

「おかえりなさいませ、旦那様。そういえば、名前を名乗っていませんでしたね。私はセザハと申します」

「せせせせ、セザハしゃんでしょかぁ！ いい名前だふね……やっぱリハーフ、とか！？」

「はい、そうです。父が外国人で——って、こんなところで立ち話もなんですから、お席にご案内しますね。当店では執事のご指名を承っておりますが、私で宜しいでしょうか？」

「ひゃいっ、もちろん喜んでッ」

「ふふ。よかった、嬉しいです」

ふわり、とセザハしゃんが微笑む。い、いやぁ～最高ですね。推しが俺に微笑んでいる……。

そのまま席に案内され、セザハしゃんが俺の隣に腰掛ける。なんだかホストクラブみたいですね。

「一緒にメニューを選びましょうか」

「んふぁ！ た、助かりましゅ！ おススメは何でせうか！？」

「ふふふ、そうですね……お腹、すいてますか？」

「ぱっちり腹ペコです」

別に嘘ではなかった。仕事の後は、いつもコンビニで飯を買って帰るから。

「ふふ、そうですか。ならオムライスなんていかがでしょう？ クチャップで好きな文字や絵をお書きしますよ？」

もーえもーえきゅん！ ってやつじゃないかぁッ！ これはもう選択の余地ナシッ！

「じゃ、じゃあオムライスでッ！」

「お飲み物はいかがされます？ ホットコーヒー、お勧めですよ。良い豆が入りましたので……デザートはチェリーパイをお勧めいたします。こちらも、新鮮なさくらんぼが入っておりますので」

……チェリーに対してチェリーパイをお勧めるとは……無知とはカナシイネ。

「じゃ、じゃあそれで〜！」

「ふふ、承知しました。厨房にオーダーを伝えますね」

そう言って、セザハキちゃんは手元の電子機器で厨房にオーダーを送った。いやー、科学の進歩って、すげー！

「ふふ、本当に……来てくださってよかった」

そしてこの極上のイケメンスマイル！ らめえっ、ちんこ起っちゃう！

オーダーした品物が届くと、セザハキちゃんはケチャップを片手にこう尋ねてきた。

「何をお揃ししましょう？」

「じゃ、じゃあ……ハートマークで♡」

「承知しました♡ おいしくな〜あれ、も〜えも〜えきゅん♡♡♡」

くはぁッ！！ イケメンが！ こんなにもかわいらしく、ケチャップでハートマークを描いてくれるなんてえっ！ 俺が感動しまくっていると、セザハキちゃんは不意にスプーンを手に取り――。

「はい、あーん？」

尊死ッ！！ なんとなんと、オムライスをすくって食べさせてくれるらしい。すげーとこころに来ちまったなほんとに。

「あ、あ〜ん……♡」

大人しく口を開け、オムライスを食べさせてもらう。おいしい！ 味わらんけど！

「どうですか？ お口にありましたか？」

「ばっちりです」

味、わかんないけど。

「ふふ、良かった。最後までお食事のお世話をさせていただきますね」

「ず——————っどアーンしてくれるってことっすか！？」

「はい♡」

「やった——————ッ！！」

ハッ、めっちゃ叫んでしまった。すみません……と俺は背を丸め、ごによごによと返く。

「ふふ、少年みたいでかわいらしいですね♡ お食事のお世話くらいで喜んでいたら、あとで大変ですね？」

「まっ、まだなんかある人すか……？」

「ええ」

するっ、とセザハキちゃんの顔が俺に近づいてくる。顔がいい！ 顔が、大変にいいーッ！

「旦那様さえ宜しければ……当店の裏メニュー、試してみませんか？」

そして、低めの艶やかな声でこちらに囁いてくる……あ、ダメだ……ちんこ、起っちゃった……。

混乱しながら状況把握しようとしていると、セザハキちゃんの手が不意に、俺のちんこを撫でた。

「えっ!？」

「しーっ♡」

いたずらっぽい笑顔で、セザハキゅんがひとさし唇に指を添えて囁く。

「お食事が終わるまでお待ちください……♡ そのあと……ね?♡」

「あ、あわ、あばばばば……」

ど、どういことだッ!? わからない、何もわからない、が……。

俺のちんこは、バキバキに勃起してしまっていた……それだけは、事実であった。

「お待たせしました、こちらどうぞ」

味の全く分からないまま食事を終え、二階に運された。

セザハキゅんがドアを開いてくれた先にあったのは……ただただダブルベッドオー
ーツ!?

「ああああああの! これは! そうい! 意味ですか!？」

「いや……ですか？」

俺より背の高いセザハキゅんが、わざわざ屈んでまで上目遣いをしてくる。やべ! 射
撃しそうでご早業!

「いやいやいやいやいやそんなそんな! セザハキゅんはいいんですか、拙者で!？」

「はい♡ ずっと気になってたんです、毎日ここを通るなあって。それに……なんだか
ギラギラした目で見られてるなあ……っ♡」

バシてた……。チーン、と頭の中で仏壇の音が鳴ったが、別にセザハキゅん構ってな
いよね?

「っていうか、むしろ嬉しいよね？」

「ふふっ♡ 可愛いなあと思って♡」

童貞、可愛いと思われてた。いやでも、悪い気は全然しませんぞ。

「宣しければ……そのバキバキの勃起ちんぽ、お鎮めますよ♡」

「ここここ、これが……裏メニュー!？」

「はい♡ たっぷりお世話をさせていただきます♡」

なんですと!? 本当に!? こんなエロ漫画みたいな展開に!?

混乱していると、セザハキゅんにやさしく、ベッドに押し倒された。えっ、拙者こっ
ち!?

「ふふ、安心してください。おちんぽハメてもらうのは私のほうですから……♡」

あっ、よかった。そう安心していると、あっという間にズボンと下着を降ろされて、ぶ
るん♡ と俺の勃起ちんぽが晒されてしまう!

「あ……すごい♡ すごい巨根……♡」

吐息交じりの声で囁かれ、ちんぽが益々喜んでしまう。

そうなのでござる。拙者……童貞ではあるものの、ちんぽはズルムケで無駄にデカイの
であった……。一生使う機会もないと思ってたのにっ!

と、言うが早い、セザハきゅんが「はむ♡」と俺の唇にキスをしてくる。

キス……えっ、キス！？ 拙者、推しとキスしちゃってるよっ！？

「ん、あむ……♡ じゅるっ、れるれるっ……♡」

しかもディープなキスだよ！？ えっちな舌遣いでめっちゃお口とお口がセックスしちゃってるよっ！？

そう思っていると、ガキガキのチンポの先端に、くちゅ♡ と柔らかな粘膜が触れた。

「もしかしてもしかしなくても——セザハきゅんのおまんこッ！？」

「はい♡ このまま、恋人みたいにべろちゅーしながら騎乗位でおちんぼ美味しく頂いちゃいますよ……♡」

「ははははははは、はひっ！ んぐッ♡！」

ぬぼ♡ とあらかじめ濡らされていたそこに、亀頭が飲み込まれる。そのまま、ずるる〜♡ とちんぼがおまんこにズボズボが飲み込まれてゆくっ……♡

「ん、はあっ……♡ やっぱりぶっという……♡♡♡ こんなのだんなおまんこでも喜んじゃいますよ……♡♡♡ あっ、あっ♡ 血管浮き出たちんぼがおまんこの中でびくんびくんしてるうっ♡♡♡」

「ななななんですかこのっ……このおまんこはっ……！♡ めちゃくちゃふわとろっ……♡♡♡ ちんぼがやさしく舐めしゅぶられてるよあっ♡」

「ふふふっ……♡ 童貞卒業おめでとうございます♡ 私のおまんこで卒業してください、うれしいです……♡♡♡」

「んほっ！ ここここちらこそお！ こんな童貞ちんぼを極上のドスケベマンコで遊ばせてくれるなんてッ！ 拙者感動しきりですよっ！」

「ピュアだなあ♡ そういうところ、好きですよ……♡♡♡ ん、くちゅ……♡♡♡」

そう言われ、再び唇を奪われる。

え、今、なんて言った？ 今……。

「は、はははは、リップサービスがうまいですねあ〜両方の意味でえ！」

「本気にしてくださいらないんですか……？ 私はずっと……旦那様にお店に来てほしかったのに……♡」

「って言いながらおまんこ『ぎゅっ♡』って締めないでえッ♡♡♡ ふーっ、ふーっ♡ すんごいちゅばちゅばちんぼしゅぶられてるう……♡♡♡」

「ピュアで可愛い上に、こーんな立派なおちんぼの持ち主だったら、好きにもなっちゃいますよ……♡♡♡ あ、これお店には内緒……ですよ……？♡」

「エッ」

ま……ま……マジ、で……？ マジのトーンだな……今の声……。

「旦那様……♡ おまんこせつないです……♡ 好きにしていから、動いてください……♡めっちゃめちゃにしていから♡♡♡」

そう、あま〜く囁きかかれて、俺はもう理性の糸がぶちんと千切れてしまった。

「うおおおおおおお！！ セザハきゅんっ♡♡♡ 好きだあッ！！！！」

ベッドにセザハきゅんを押し倒し、もう欲望のままにずばんずばんと腰を動かしてしまふ。

「んはあっ♡♡♡ ぶっといちんぼごりゅごりゅこすれてりゅっ♡♡♡ 旦那様あ♡